

地域組織における心理的安全性と 共助活動の実行可能性に関する分析

山口 由美子¹・長曾我部 まどか²・谷本 圭志³

¹ 非会員 三重県農林水産部 (〒514-8570 三重県津市広明町 13 番地)

E-mail: yamagy14@pref.mie.lg.jp

² 正会員 鳥取大学助教 工学部社会システム土木系学科 (〒680-8552 鳥取市湖山町南 4-101)

E-mail: mchoso@tottori-u.ac.jp (Corresponding Author)

³ 正会員 鳥取大学教授 工学部社会システム土木系学科 (〒680-8552 鳥取市湖山町南 4-101)

E-mail: tanimoto@tottori-u.ac.jp

中山間地域では地域住民による送迎や買い物代行といった新たな共助活動を行う必要性が高まっている。しかし、全ての地域においてこれらの活動を実行できるとは考えにくく、地域の雰囲気や組織体制といった地域の特性が共助活動の実行可能性に影響すると考えられる。そこで、本研究では地域の雰囲気を測る指標として心理的安全性の指標を援用し、因子分析と一般化線形モデルを用いて地域の雰囲気と共助活動の実行可能性との関係を明らかにした。鳥取県東伯郡北栄町の地域福祉活動に携わる住民に対してアンケート調査を行った結果、新しいアイデアを受け入れてもらえる、困難な課題に向き合うことができるという「挑戦」の雰囲気が、共助活動の体制・組織づくりや共助交通の実行可能性に影響を与えることが示唆された。

Key Words: *psychological safety, factor analysis, community activities*

1. はじめに

(1) 背景と目的

中山間地域では、生活サービス施設の縮小や撤退に伴い、地域住民による送迎や買い物代行といった新たな共助活動を行う必要性が高まっている。一方で、全ての地域においてこれらの活動を実行できるとは考えにくく、地域の雰囲気や組織体制といった地域の特性が共助活動の実行可能性に影響すると考えられる。自治体はこのような特性を考慮したうえで効果的な支援を行う必要があるものの、地域の特性と共助活動の関係は不明である。近年、組織行動学の研究では、組織における発言や活動のしやすさといった心理的安全性が組織の生産性に寄与することが報告されている。

そこで本研究では、地域の雰囲気を測る指標として心理的安全性の指標を援用し、因子分析と一般化線形モデルを用いて、地域の雰囲気と共助活動および共助活動に必要な組織・体制づくりの実行可能性の関係を明らかにする。鳥取県東伯郡北栄町の地域福祉活動に携わる住民に対してアンケート調査を実施し検証する。

(2) チームの心理的安全性

心理的安全性とは 1965 年に Shein らが提唱し、1999 年に Edmondson¹⁾がチームの心理的安全性として発展させた組織行動に関する概念である。Edmondson は心理的安全性を「関連のある考えや感情について人々が気兼ねなく発言できる雰囲気」とし、知識が絶えず変化する組織や人々が協働する必要がある組織において心理的安全性は必要不可欠と述べている。Google は心理的安全性が高いチームは離職率が低く収益性が高いという調査結果を報告している²⁾。石井³⁾は、日本におけるチームの心理的安全性には、①話しやすさ、②助け合い、③挑戦、④新奇歓迎という 4 つの因子があることを述べている。

心理的安全性はチームングに対し良い効果を与える。ここでチームングとは、安定したチーム構造を持たないまま一丸となって動き協働することを指す¹⁾。集落組織では、主体となって活動を行う役員は輪番制であることが多くチームの構成員が固定されることは少ない。従って集落組織においてもチームングが必要であり、チームングの基盤となる心理的安全性が重要な役割を果たすと考えられる。チームの心理的安全性は企業組織を対象とした調査に基づく知見であるが、集落組織にも援用でき

る可能性がある。そこで本研究は、地域版のチームの心理的安全性の指標を作成し、地域の雰囲気を測ることを試みる。さらに、それらの雰囲気が共助活動に関する体制・組織づくりや共助活動の実行可能性にどんな影響を与えるのかを明らかにする。なお本研究における地域は自治会単位とする。

2. 支えあいの活動に関するアンケート

本研究では 2021 年に鳥取県東伯郡北栄町において実施したアンケート調査の結果を用いる。北栄町は鳥取県の中部に位置し、人口 14,732 人、自治会数は 63 である。

本調査は自治会における共助活動の実現可能性を把握することを目的として行った。調査の概要を表-1 に示す。北栄町社会福祉協議会主催の合同研修会に参加した福祉推進員、民生児童委員、愛の輪協力員を対象とした。回答者数は 84 名であった。

ここで、福祉推進員とは行政・民間福祉団体等の行う福祉行事への協力等を行う住民を指す。各自治会 50 世帯を基準として 1 名選出される。民生児童委員とは、民生委員法に基づき厚生労働大臣から委嘱されている福祉に関するボランティアを指す。愛の輪協力員とは、高齢者ひとり暮らし世帯、高齢者夫婦世帯などに対して声掛けや見守り活動を行う住民を指す⁴⁾。これらの人々は、地域で共助活動を行う際に参画する可能性が高い。

表-2 自治会の雰囲気に関する質問（あてはまる～あてはまらないの 5 段階）

質問	略称
1) 役員会や総会で気兼ねなく意見を言える	気兼ねなく意見
2) 役員会や総会で質問や気づいたことを言いやすい	質問しやすい
3) 役員会や総会で話し合った内容は共有される	内容の共有
4) 隣近所の人に気軽に相談しやすい	気軽に相談
5) 小さな困りごとはお互いに助け合える	助け合い
6) 多くの人が自治会の活動（総事など）に協力的である	協力的
7) 前例にない新しいアイデアも受け入れてもらえる	新しいアイデア
8) 多少のミスや失敗には寛容である	失敗に寛容
9) 困難な課題に向き合うことができる	困難な課題
10) 異なる考えや価値観を持っていても否定されない	異なる価値観
11) 一人一人の良いところを見られる	良いところ
12) 同じ考えの人だけで物事を進めようとする	同じ考え

表-1 調査の概要

調査名	支えあいの活動に関するアンケート
期間	2021 年 2 月 22 日
対象	福祉推進員 33 名、民生児童委員 24 名、愛の輪協力員 18 名、不明 9 名の合計 84 名
自治会	38 自治会
主な質問項目	<ul style="list-style-type: none"> ・回答者の属性（年齢、性別、職業など） ・自治会における 7 種の共助活動の必要性、参加や実現の難易度（難しい～易しいの 5 段階） ・自治会の雰囲気（あてはまる～あてはまらないの 5 段階） ・自治会における 12 種の活動の実現可能性（思う～思わないの 5 段階）
共助活動（7 種）	買い物の支援、家事の支援、移動の支援、子育ての支援、名産品や特産品の加工・販売、交流施設カフェ・レストランの運営、空き家や里山などの維持・管理

アンケートでは、自治会の雰囲気をたずねる質問、体制・組織づくりと共助活動の実現可能性をたずねる質問を行った。表-2 に自治会の雰囲気をたずねる質問を示す。心理的安全性は、①話しやすさ、②助け合い、③挑戦、④新奇歓迎の 4 つの因子から構成される³⁾。石井の定義を参考に 12 個の質問を作成した。

自治会で共助活動に取り組むためには、まず体制・組織づくりが必要である⁵⁾。そこで、体制・組織づくりに

表-3 自治会における体制・組織づくりの実現可能性に関する質問（思う～思わないの 5 段階）

質問	略称
1) 活動の必要性や方向性について役員と話し合うこと	役員
2) 活動の必要性や方向性について住民と話し合うこと	住民
3) 活動について住民のニーズを調査すること	調査
4) 活動のリーダーになる人を見つけること	リーダー
5) 活動のノウハウ（知識や技術）がある人を見つけること	ノウハウ
6) 活動の計画をつくること	計画
7) 活動の意義や方針について住民の理解を得ること	理解
8) 活動の担い手として参加する人を見つけること	担い手
9) 活動に関する勉強会や研修の場をつくること	研修
10) 他の地域に視察に行く機会をつくること	視察
11) 活動について外部の人（行政や他団体）に相談すること	相談
12) （行政や他団体に対し）活動の連携を働きかけること	連携

必要と考えられる活動についてたずねた。表-3に質問を示す。これらの質問は先行研究⁹⁾に基づいて作成した。

3. 心理的安全性の因子の抽出

表-2の自治会の雰囲気に関する質問に対し因子分析を行い心理的安全性の4つの因子を抽出した。まず、スピアマンの順位相関係数により12の質問項目の相関を確認した。相関が0.5以上の変数をひとつも持たない4つの項目については分析から除外した。次に、8つの質問項目について、Kaiser-Guttman基準を用いて因子数を決定した。因子負荷量の推定には最尤法を、軸の回転はオブリンミン回転を用いた。分析の結果、適切な因子数は4因子、累積寄与率は74.8%となった。

因子分析の結果を表-4に示す。因子1は「困難な課題」と「新しいアイデア」の影響が大きいため「挑戦」、因子2は「気兼ねなく意見」と「質問しやすい」の影響が大きいため「話しやすさ」、因子3は「異なる価値観」と「良いところ」の影響が大きいため「新奇歓迎」、因子4は「気軽に相談」と「助け合い」の影響が大きいため「助け合い」と名づけた。

4. 心理的安全性と共助活動の関係

心理的安全性のどの因子が体制・組織づくりおよび共助活動の実行可能性に寄与するのかを順序ロジスティック回帰分析によって明らかにする。ここで、被説明変数

表-4 各観測変数の因子負荷量

質問	因子1	因子2	因子3	因子4
9) 困難な課題	0.883	0.001	0.061	-0.014
7) 新しいアイデア	0.802	0.039	-0.038	0.138
1) 気兼ねなく意見	-0.073	0.987	0.015	0.107
2) 質問しやすい	0.235	0.744	0.033	-0.18
10) 異なる価値観	-0.016	0.02	1.001	-0.017
11) 良いところ	0.238	-0.08	0.454	0.239
4) 気軽に相談	0.095	0.029	-0.036	0.734
5) 助け合い	0.094	0.104	0.102	0.608
因子寄与率	0.227	0.204	0.166	0.151
累積寄与率	0.227	0.431	0.597	0.748

質問の番号は表-2と対応している。

は表-3に示す体制・組織づくりに関する質問への回答であり、思う、やや思う、どちらともいえない、あまり思わない、思わないの5段階である。共助活動については、表-1に示す活動のうち5つの活動を対象とする。共助活動は、自治会で実現することの難易度をたずねており、難しい、やや難しい、どちらともいえない、やや易しい、易しいの5段階である。説明変数は4つの因子の因子得点である。

推計結果を表-5と表-6に示す。パラメータの推計に際してはAICが最良となるように変数選択を行った。モデルの適合度については、McFadden 擬似決定係数が0.2~0.4だと十分に適合していると思わせるが、推計結果では十分な値を得られなかった。このため解釈には留意が

表-5 推計結果 (体制・組織づくりの実現可能性)

活動	話しやすさ	助け合い	挑戦	新奇歓迎	サンプルサイズ	McFadden 擬似決定係数	対数尤度	AIC
1) 役員	0.48*	-	0.77**	0.46*	73	0.07	-77.86	167.71
2) 住民	0.68**	-	0.75**	0.32	72	0.08	-87.87	189.74
3) 調査	-	-	0.85**	-	70	0.09	-86.05	182.10
4) リーダー	0.90**	0.53	0.91**	0.47*	71	0.09	-80.24	174.47
5) ノウハウ	0.72**	0.51	0.72**	-	73	0.08	-91.54	197.07
6) 計画	1.11**	0.41	1.08**	0.38	72	0.14	-82.34	180.68
7) 理解	1.10**	1.03**	1.18**	-	72	0.18	-78.95	171.91
8) 担い手	0.88**	0.73**	1.10**	-	73	0.14	-84.72	183.44
9) 研修	0.77**	-	0.80**	0.41	73	0.08	-92.86	199.73
10) 視察	0.57*	-	0.77**	0.57*	73	0.07	-94.11	202.23
11) 相談	0.53*	0.84**	1.03**	-	74	0.11	-92.70	199.40
12) 連携	0.60*	0.45	1.15**	0.48*	73	0.09	-92.37	200.73

**：1%で有意，*：5%で有意

表中の“-”は変数選択によって除外された変数を示す。

表-6 推計結果 (共助活動の実現可能性)

共助活動	話しやすさ	助け合い	挑戦	新奇歓迎	サンプル サイズ	McFadden 決定係数	対数尤度	AIC
家事	0.36	-	-	-	69	0.01	-86.14	180.28
移動	-	-	0.42*	-	69	0.03	-86.85	183.71
子育て	-	-	0.36†	-	69	0.02	-84.69	179.39
交流	-	-	0.27	-	68	0.01	-97.53	205.07
空き家	-	-	0.36†	-	66	0.02	-86.16	182.32

**：1%で有意，*：5%で有意，†：10%で有意 表中の“-”は変数選択によって除外された変数を示す。

必要だが、以下では有意な変数に着目して、推計結果より得られた知見を整理する。その際 5%以下で有意な変数に着目して考察する。

まず、体制・組織づくりについて考察を行う。12の活動について有意なパラメータはすべて正であることから、心理的安全性の4つの因子は組織・体制づくりに対して肯定的であることがわかる。特に、挑戦の因子は全ての活動に対して正の影響を与えている。同様に、話しやすさの因子も、調査を除くすべての活動に肯定的な影響を及ぼしている。新しいアイデアを受け入れてもらえる、困難な課題に向き合うことができる、という地域の雰囲気や、地域の中で気兼ねなく意見を言える、質問できるという雰囲気は組織・体制づくりに貢献することが明らかになった。一方で、助け合いと新奇歓迎の因子は一部の活動に肯定的に寄与することがわかった。次に、共助活動と因子の関係について考察する。5つの活動について有意なパラメータは、挑戦の因子のみであり、移動の支援について正の影響を与えることがわかった。ここで有意水準を10%以下とすると、子育ての支援と空き家・里山の活用にも挑戦の因子が肯定的な影響を及ぼすことがわかる。以上より、チームの心理的安全性は、特に組織・体制づくりに寄与することがわかった。

5. おわりに

本研究では、地域における共助活動の体制・組織づくりや共助活動そのものの実行のしやすさに着目し、チームの心理的安全性の指標を用いた分析を行った。地域版の心理的安全性の指標を作成し、因子分析と一般化線形モデルを用いて地域の雰囲気と共助活動の実行可能性と

の関係性を明らかにした。鳥取県東伯郡北栄町の地域福祉活動に携わる住民に対してアンケート調査を行った結果、新しいアイデアを受け入れてもらえる、困難な課題に向き合うことができるという「挑戦」の雰囲気が、共助活動の体制・組織づくりや共助交通の実現可能性に影響を与えることが示唆された。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 JP21K14267 の助成を受けて行った研究の成果を含む。また研究遂行にあたり、北栄町社会福祉協議会と住民の皆様よりアンケート調査への協力を得た。ここに記して謝意を示す。

参考文献

- 1) エイミー・C・エドモンドソン：チームが機能するとはどういうことか、英治出版、2014。
- 2) Google re Work: 「効果的なチームとは何か」を知る、<https://rework.withgoogle.com/jp/guides/understanding-team-effectiveness/steps/introduction/> (最終アクセス：2021年9月27日)
- 3) 石井遼介：心理的安全性のつくりかた、日本能率協会マネジメントセンター、2020。
- 4) 北栄町福祉課ホームページ、<http://www.e-hokuei.net/1303.htm> (最終アクセス：2021年9月27日)
- 5) 国土交通省、実践編「小さな拠点」づくりガイドブック、2015。
- 6) 長曾我部まどか、谷本圭志、土屋哲：組織の健康度に着目した集落の特性と持続可能性に関する分析、都市計画論文集, vol.55, No.3, pp. 1189-1196, 2020。

(Received ??, 2021)
(Accepted ??, 2021)

ANALYSIS OF RELATIONSHIPS BETWEEN PSYCHOLOGICAL SAFETY AND ACTIVITIES FOR MUTUAL ASSISTANCE

Yumiko YAMAGUCHI, Madoka CHOSOKABE and Keishi TANIMOTO